

発行で、慶応四年閏四月十八日から十月十八日までを記しており、病院の入院患者に関する研究に際しては、AからBの3までの四種の日誌を日記と比較しつつ調査する必要があることが解かった。

五、そして横浜軍陣病院が、慶応四年七月二十日に設立された東京大病院の支営の立場におかれ、大病院を支配取締した機関が、東京府、鎮將府（九月十三日から十月十八日まで）、そして東京府と変った点も考慮に入れて調査研究をする必要性も存在することが解かった。

（平成九年九月例会）

荒川保雄：虱に賭けた四十年の生涯

佐分利 保雄

荒川保雄は明治二十六年会津に生まれ、大正六年東京農科大学を卒業した。大正十一年ユタ州立農科大学に入学、昆虫学を専攻し、大正十四年に卒業、理学士の称号を得た。大正十五年、南満州鉄道（株）に入社、農事試験場公主嶺支所、熊岳城支所の病理昆虫科にて、主としてコロモジラミの研究に専念し、千数百枚におよぶ学位請求論文を完成させ、休暇を得て、帰省中、平町（いわき市）四倉海岸にて急逝した。四十歳であった。先輩、僚友、遺族によって、この論文を「衣虱の研究」と題する単行本とし、満鉄の奨学資金により自家出

版された。その内容をみると、東北人のねばりに西洋人の合理主義が加わり、繰り返し行われた実験の生データがそのまま記載されており、読むに難渋するほどであるが、六十年を経た今日でも、この本が他の研究文献に引用されていることは、彼の業績が高く評価されている証拠であろう。

二百二十一頁のうち、百五十八頁は生態学的研究に、二十二頁が解剖生理、十八頁が病原体の媒介に、残る頁はケジラミなどの記載に費やされている。

彼は日本を代表するしらみの研究者であったが、序文にもあるように「天彼に貸すに幾ばくの余命をもつてするならば、学会最高の榮譽を担い得たであろうものを……」まことに惜しいことであった。熊岳城分場長、渡辺柳蔵らの論文刊行委員により、一周忌にこの大著が出版され、世に出たことは、ご遺族の喜びとともに、後学者の為に大いなる遺産を残したと言うべきであろう。

（平成九年九月例会）

ペスト残影シリーズ その八

ライン川中流域に「ペスト残影」を求めて

滝上 正

第三回本大会で発表した後、さらに、ライン川中流域で確認できたペスト残影について紹介したい。